

歌の周辺

昭和四十五年五月七日、小野茂樹さんが不慮の交通事故で亡くなった。小野さんは優れた歌人であると同時に、私の勤め先（河出書房新社）の先輩でもあった。その死を惜しんで私は直ぐ「死のほとり」十八首を詠んだ。

三年後の昭和四十八年五月七日、多磨霊園を訪ね、墓参りをした。北原白秋その他著名な人々の眠る広大な霊園は、深い静寂に包まれ、どこかの木立で山鳩が啼いていた。なお「木隠れ」はコガクレと読む。

（高野公彦）



(写真・木畑紀子)

高野公彦うた紀行・3

木隠れに山鳩啼けり日もすがらこの声
を聴く君はかなしゑ

——『汽水の光』

【鑑賞】「羊雲忌」四首中の一首。「羊雲忌」は小野茂樹の忌日。歌人として編集者として敬愛した先輩であった。歌の場面は五月の多磨霊園。木隠れに啼くくぐもるような山鳩の声。古風な詠嘆の助詞「ゑ」に、死者の無念をかみしめる深い痛みが感じられる。肉体を喪った人に「この声」はどんなふうに聞こえるのだろうか。小野茂樹は三十四で事故死した。

(小島ゆかり)



ふるさとコレクション——174

藤村の井戸（長野県小諸市）

現在の日本で〈井戸〉はどのくらい現役で使われているだろうか。小諸の街のまん中あたりに30年ぐらい前まで使われていた名水の井戸がある。今では『藤村の井戸』と呼ばれ、小諸ふるさと遺産としてきれいに整備保存されている。

文豪島崎藤村が27歳の時から7年間、小諸義塾の英語の教師として当地に住んでいた。その時使っていた井戸である。当時は当然つるべ式であった。この井戸水は、長野県が選定した信州の名水・水辺百選のひとつである。しかし藤村の住まいから井戸までは1kmを越える距離で、なんと言っても急な坂道だ。当時は桶を天秤棒で担いだのだと思われる。

赴任して翌年秦冬子と結婚。藤村はもちろんだが、冬子もよく水汲みをしたと記録に残っている。『千曲川のスケッチ』の中に井戸通いしたことや、帰りになじみの小料理屋に寄りひと息入れて帰ったことなど書かれている。また次々子宝にめぐまれ、妻の冬子は身重の体でも時には水汲みをしたと記されている。

21世紀の初頭まで、雪の日はタクシーが乗車を断ったような小諸の坂道を、水汲みに通ったことは重労働だったと思う。

（写真・解説 手塚寿々枝）